

私の養鶏随想録

加藤 宏光

「生き物好き」の感情を封印

筆者は1943年生まれで今年古稀となる。24歳から養鶏産業に携わってきたが、大学院で鵝のアレルギー性脳炎に伴うアミロイド症、次いで鶏の実験的アミロイド症がテーマであった期間を含めれば48年間もの長期間、鳥類にのみ関わってきたことになる。

幼い頃から生き物好きで、反抗期に一時期人間嫌いになったために、獣医師になると決めたのが中学2年生の時。それ以来獣医師になることを明言して、受験生活を送ったことも思い出される。大阪府立大学の獣医学科へ進学した当初は、漠然と好きだったペットの診療を思い描いていたものの、専門教科に進んで愕然とした。学ぶために、大好きだった動物を殺さなければならぬのである。

実験用の犬は、寂しさゆえに人間に懐きやすい。受け持った実験犬が尻尾を振っているのに、麻酔をかけ切り刻むことになる。動物を好きなままではとてもできる作業ではない。そこで、筆者は《生き物を好きになる》感情を封印した。ペット診療への思考をストップしたことになる。専攻研究で病的状況下の組織変化を顕微鏡で調べるという診療とは距離のある《病理学》を選んだのもこうした心理変化が影響したのかもしれない。

もっぱら、研究分野に展開していった学生生活で、鳥類に接しながらも将来は哺乳類(犬、猫等のペットあるいは牛、馬あるいは豚)を勉強したいと思っていた筆者を養鶏の世界へ導いたのは、当時の指導教官であった故望月宏教授である。またそれを切望し、自分の研究所へ招き入れたのは、当時としては

革新的な研究者であった故吉村省吾博士であった。それから47年か過ぎようとしている。思えば長い年月である。

本シリーズ連載の機会をいただき、筆者が幼い頃から現在に至るまでに川見、あるいは没頭した鶏の世界の逸話を紹介したい。

自転車で種卵を買いに走る

鶏に接した最初は10歳、小学校5年生の春ころであろうか。当時、工業短大の助教授であった父が、職場の知人が持て余した褐色鶏と白色レグホンを3羽もらってきたのに端を発する。これらの鶏は父の作った鶏小屋で平飼いされ、1日2〜3個の産卵を続けた。毎日与える飼料は数キロ離れた町にある餌屋さんまで自転車で出向き、2〜3キロずつ買って、トリ菜と呼ばれた独特の野菜を刻んだものと混ぜ合わせて与えたものである。当時2キロの鶏用混合飼料が500円ほどしていたから、トン当たり2万5000円、34歳であった父の給料が1万5000円余りの時代であるから相当高いものであった。

自転車で大学へ出勤し、午後6時前には帰宅して、家族全体で夕食を共にする、という日常はどの家族にとっても当たり前の生活であった。塾もない小学生の最大の課題はかきかき遊ぶかであり、野球やチャンバラ遊びを繰り返す毎日で、月に1〜2度友達と釣りに行き、捕らえた泥鰌などの小魚を生き餌として与えた。鶏が泥鰌などを頭から丸呑みするのを飽きもせずにジッと眺めていた。

次の年に巣籠もりをした褐色鶏を見て、父は筆者に雛を孵すことを薦めた。筆者の生き物好きを手がかりに、勉強嫌いを何とか直そうとしたに違いない。出入りの行商人に種卵を購入する先を聞き、自転車で出かけた。

尋ねながら行きあてた先には、20羽前後の区画が五つ六つつながる平飼い鶏舎(100〜150羽/鶏舎)が3棟ほど並んでいた。これが筆者の接した初めての養鶏場というものである。当時の農家ではどこでも20〜30羽の庭先養鶏が営まれていた。その時代としてはかなりの規模であったこの養鶏場が、当時としては当たり前の業態、すなわち委託種鶏場であったと知るのには、本格的に業界に入ってからのことである。

1個25円の種卵を15個分けてもらい、ネストに置くと、巣籠もりしている褐色鶏はそのまま抱卵を始める。

毎朝6時に起き出し、親鶏をネストから抱き出して餌を食べさせる間、発育卵には布団綿を被せて冷えないように保温する。20日間この連続でいよいよ21日目の朝、躍る心を抑えながら鶏小屋を覗くと、ピョピョという小さな鳴き声が聞こえ、親鶏に手を伸ばすと毛を逆立てて『クォー』と脅すように鳴き声を上げ、さらに近づく手を突いたり翼で激しく攻撃する。親鶏の羽毛の間からヒヨコが黄色い頭を出したかと思えばすぐに隠れる。

15個抱卵させて、5〜7個孵化するのがせいぜいであった。こうして孵ったヒヨコを親鶏と一緒に飼えるように作った独特の育成箱へ移し、親の保護の元に育てるのである。

このような趣味の鶏飼育は高校時代まで続いた。生活に密着して飼われた鶏は人に怯えることがなく、よく懐く。産業動物としての鶏の示す個性とはまったく趣を異にしている。高校3年生の学芸祭への展示物として、解剖した鶏を出品したのも今日に繋がる気がして、時に妙な縁を感じる。

今日の養鶏産業へ連綿と続く、私自身の経験のページをめくりながら、特筆すべき事象をシリーズとして紹介してみたい。

古くからの養鶏に近い方々には回顧的ストーリーとして、若い世代にはそういう歴史があったことを知っていただくだけでも意義があるのではないかと考えている。

初遭遇の伝染病はヒナ白痢症

大阪府立大学で学んだ鳥類の組織病理学は哺乳類のそれとはまったく概念の異なるものであり、その時代には鳥類(特に鶏)の疾病に関する研究が未発達であったこともあって、雲を掴む思いであった。

筆者の指導教授は鶏の伝染病病理学を追究したいという意向が強く、当時新進気鋭の病原学者であった故吉村博士とコラボレーションをすることによって、フィールドに疎い大学へ生産現場の情報を導入しようとしたのであろう。その成果として、わが国で初めての発生報告事例を二つの伝染性鶏病についてなされた。その一つが鶏伝染性喉頭気管炎であ

り、続いて鶏伝染性脳脊髄炎である。筆者が吉村博士の招きで大阪市立家きん試験場へ奉職したのは昭和41年であった。

家きん試験場が設立された昭和36年当時、大阪市には200万羽を越える採卵養鶏場があったという。全国の採卵鶏総数がおおよそ7000万羽のころ、しかも専業養鶏場でも平均的飼育羽数が1500羽程度であるから、200万羽といえど一大産業地帯ということになる。

家きん試験場の設立を企画したのは、当時畜産課に所属した故井上哲夫氏で、彼は獣医師でありながら、飼料と育種に興味を持たれた。現在でも獣医師で育種や飼料に興味を持つ人はそう多くない。養鶏産業の企業化に先立ち、このポイントに注目された初代場長の先見性にいまこそ敬意を表したい。

この飼養部門に関連して実験用に飼育する鶏の中で死亡するものを中心として、鶏病を検証することを目的とした検査機関として、鶏病部門が付属的に設けられたという。しかし、複雑な鶏病の発生で混沌としたフィールドを解明することで、家きん試験場は鶏病検索を目的とした研究所として、目覚ましい展開を示した。

筆者が家きん試験場に勤め始めたのは創立6年目で、すでに吉村博士の名声は揺るぎないものになっていた。筆者が初めて遭遇した典型的な伝染病は《ヒナ白痢症》であった。現在はめったに耳にしないヒナ白痢症も当時は当たり前のように発生していた。ヒナ白痢症自体は当時から家畜法定伝染病であったため、本来その扱いは厳しいものであったはずだが、取り立てて大騒ぎをした覚えはない。

当時はすべてに対しておおらかで、とりわけ家きん試験場は行政権をもたないサービス機関であったために、大きな問題が発生しない限り、大阪府の家畜保健衛生所との暗黙の了解のもとに処理されていたように思う。

(筆者：(株)ピーピーキューシー代表取締役社長／農学博士・獣医師)